



TITLE:

鼎談1: 医学と工学との融合を再考 する

AUTHOR(S):

谷口, 栄一; 二木, 淑子; 坪山, 直生

CITATION:

谷口, 栄一 ...[et al]. 鼎談1: 医学と工学との融合を再考する. 安寧の都市 -
-医学・工学からのアプローチ (Liveable Cities) 2015: 16-28

ISSUE DATE:

2015-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193524>

RIGHT:

谷口栄一(安寧の都市ユニット ユニット長/京都大学大学院工学研究科 教授)

二木淑子(京都大学大学院医学研究科 教授)

坪山直生(京都大学大学院医学研究科 教授)

谷口●安寧の都市ユニットがなにをめざすのか、それは三世代が健康的に生き生きと活動できる都市をつくることだろうと思います。とはいえ、そこに到達するアプローチはいろいろあります。われわれは工学的にアプローチするのですが、医学の研究者は医学や公衆衛生学などからアプローチされます。工学系はどうしてもITやロボットなどの技術を先行させます。しかし、このユニットをとおして他分野の専門家と話すことで問題が修正され、視点が広がる意義があったと思っています。

坪山●履修生も、安寧の都市ユニットに関係する工学系の教員も、そういう発想を最初からおもちだった。心と体が元気でいられるまちづくりに、技術系の進歩をどう活かすかという発想。しかし、医学と工学の融合はむずかしいとも感じましたね。どうすることが融合かもわからない。

二木●私の専門は障がいのある方が対象ですが、当初はこのユニットで私になにを期待されているのかよくわからなかった。3年くらいして、ようやく互いの違いのようなものが少し見えてきました。一般的に、工学系の方たちの発想は健康な人を基準にしているのですね。障がいのある人が存在していることはわかっているけど、道路や社会システムを工学的に扱うときは、そういう人たちをマイノリティとして無視してしまいがちです。ユニバーサルデザイン的な発想の視点が弱い。

全体から個を考える視点と、個から全体を考える発想とがありますが、私たちはどちらかというと「目の前の人にとってどうなのか」というアプローチをします。互いにどう噛みあうかの課題は、そういう点でアプローチが難しかった気がします。

谷口●そのことは笹田教授も最初に指摘されていましたね。「われわれはマスを対象にするのではない。一人ひとりの人間、個の幸せをどうするか」の視点でスタートするんだ」とずいぶん強調されていた。おっしゃるとおり、障がいのある方だけでなく、お年寄りもそうです。まったく健全な高齢者というのは、たぶんいない。個人を中心に考えることは安寧の都市ユニットの構想段階でもあるていど合意はできていたと思うのですが……。

坪山●これなら三世代が幸せに暮らせるといった理想に近い環境ができたとして、大事なことは、若い人はおじいちゃん、おばあちゃんとそこで一緒に話をしたいと思うかどうか。おじいちゃん、おばあちゃんも、若い人にいろいろなことを教えてやりたいと思うかどうかでしょう。

それに、中年や高齢者もほどよく体を動かすことが必要ですが、体を動かす目的で運動するのは一部の人です。動かしたいなにかの目的を保持することが大事だろうと思う。まちづくりでも、体を動かす場や機会を用意することが大事です。交通網の整備に頼らなくてもよいまちづくりの方法です。暮らしに必要な施設がほどよい距離にある環境ですね。交通網を利用してどこに行きたいか、なにかをしたいと思うかは、個人が歩んだ道のりが決めることだから画一的には捉えられないのですが……。

■過疎に高齢化に認知症……

谷口●個人の想いからスタートして、なんらかのかたちにまとめるには公の支援も制度も予算も必要です。そうすると、どこかで従来のまちづくりと似てくるかもしれないが、そこに至るプロセスはかなり違う。

たとえば、滋賀県守山市がデマンドバスをはじめた。車を運転できない人たちが病院や買物に行くときは、連絡するとバスが迎えにきてくれるシステムです。お金がかかるから政策的にはたいへんだけれども、やってみると効果はあるのですね。運転免許を返上する高齢者も現れるし、家族の負担も軽減されるなどの成果もある。だからといって、これをどこまで拡げることができるかという、やはりむずかしい。

アプローチは個のニーズから出発するが、それを政策などにしようとする単位が都市になるなど面的に拡がる。そのプロセスを新しいアプローチで展開できるようにする必要があります。それがガバナンス。一つひとつの問題の解決には、どうしても適切なガバナンスが必要です。

谷口栄一

たにぐち・えいいち
安寧の都市ユニット・ユニット長。
1975年に京都大学大学院工学研究
科修士課程を修了後、建設省に入省。
2002年から京都大学工学研究科教授。
研究テーマは「効率的かつ環境に優
しく安全な都市物流システムに関する研究」。



坪山●人口規模、平面的広がりなどで、やりやすい単位はありますか。

谷口●過疎地域などの小さな単位。人口が大きくて採算がとれるようだと民間でも対応できますから。課題はやはり、人口が少ないなどで採算条件の厳しい地域のお年寄りや障がい者など、根の深い問題を抱えている方への政策。そういう人たちがどういう問題を切実に思っておられるかですね。

二木●これからは認知症の方がすごく増えます。そういうなかで、安全と利便という矛盾する要素をどうするか。そういう課題型の問題についての講義なり議論がもっとあってもよかったですね。そして、緊急の議題があると早い段階で集約して、研究者一人ずつにその課題に取り組んでいただく、そういうやり方もあったかなと反省しています。

いっぽう、このユニットの成果ですが、履修生や聴講生は絢爛豪華な講師陣のセミナーや講義を聞くことができたと思います。行政などから集まった100人近い人材は、いまの時点で成果が結実していなくとも、しだいに目に見えるようになると思うし、すでに少し出てきているようにも思います。履修生に企画提案する人が増えてきたのは、やはり期待に応えたプロジェクトだったからだだと思います。そういう100人近くの履修生が近畿を中心に横のつながりをつくってきた。しかし、プロジェクトが終わって母体がなくなるとだいたいは続かない。(笑) ちょっと残念に思いますね。

谷口●これからは、認知症とそうでない人との中間のような人もたくさん出てくるでしょうね。そういう時代を考慮したまちづくりは、これまであまり例がない。これも緊急の課題です。行方不明になった認知症の人の保護と身元確認はたいへんです。しかし、現状はデータさえないといえます。

坪山●発生率や有病率のデータはそれなりにあります。ただ、個人情報の問題が絡んでくると、どこかで明確ではなくなります。

谷口●在宅看護のデータを調べようとする、「個人情報を出せない」という壁があった。工学的アプローチはデータに基づいて解析するものですが、健康の分野ではそのデータが得られない。これはこんごの課題ですね。

■課題は多くて、しかも大きすぎるが

谷口●ところで、医学系の側から見て、まちづくりとか都市計画というのはおもしろいですか。(笑)

坪山●一定の人口があれば病院などどうしても必要な施設があります。すると、どの単位でまちづくりを考えれば効率がよく、しかも住みやすいのかを考えます。工学の分野でも、そういう研究は当然されるのでしょうか。

谷口●あまりないかもしれない。都市計画と病院の立地計画には、ほとんど接点がないからです。都市計画審議会などに参加していますが、病院が議題にのぼったことはない。行政にとっては、都市計画は都市計画、病院の計画は病院の計画。せめて情報交換は必要ですね。

二木●政策レベルになると、省庁の縦割りみたいなものがあるし、人間健康科学には医療経済などのポリティカルな分野や社会学系の分野を専門にしている人は少ない。どういうところでなにを課題にしているかを早い時期にディスカッションしておけばよかったですね。

谷口●これからでも遅くはない……。 (笑) 同時に、緊急の課題もある。さきほどの認知症の人の生活を向上させるまちづくりもその一つ。いろいろな病気の人のデータベースを都市計画などに活用することには問題はあるとは思うが、これからでもよいから研究すべきだと思うのですよ。

二木●なかなか新しい切り口が出なかった。自分たちがよく知っているところを小出しにするだけ。社会実験的なモデルをつくろうとしても、じっさいのプロジェクトを見ているとたくさんの課題があることがわかる。そういう課題に積極的に参画しないで、巷に出ている出版物の「認知症とは？」というような一般論を話しているにすぎない。そういう点がちょっと残念だった。だれが中心となって主導するかが見えにくかったのかもしれない。

谷口●共同研究的な踏み込みが少なかったということですかね。

二木●そうですね、守山市の地区を調査するプロジェクトはあったが、それ

でも具体的にはよくわからなかった。

谷口● 共同研究の枠組みがあまり明確ではなかったかもしれない。

二木● 「教育プロジェクトなんだな」という受け取り方。

谷口● 教育中心のユニットだったということですかね。

二木● カリキュラムが3年めくらいでかなり大幅に変わりましたね。最初はかなり総花的な内容だった。それでも3年めくらいから少しずつフィードバック——こういう観点で考えるのかという方向性が生まれてきた。

谷口● フィードバックはけっこうおもしろかったですね。履修生のいろいろな観点が提示されました。

坪山● 履修生の質問や対話の反応には、自分の専門に関連することに興味をもって自らの発想に加えたいという熱意を感じましたね。みなさんすごかった。工学系の谷口さん、山田圭二郎さん、安東直紀さんと一緒に合同講義をしましたが、新鮮な感じでしたね。

■元氣なお年寄りを増やすまちづくりの視点

谷口● 私は二木さんとも対話しました。高齢者に車の運転をさせるべきか止めさせるべきか、免許を返上してもらうべきか。ああいう議論は、工学と医学との接点としてよかったと思う。政策よりむしろ、判断とかマニュアルづくりの話ですが、科学的にできそうな分野なので、これからもああいう研究は続けるべきではないかと思いました。とくに運転ですね、現実には高齢者の事故が増えている。日本の国家予算のなかで医療、看護、介護の費用がどんどん増えている問題もある。しかし、これをどうするんだという話はあまりできなかった。軸になったのは、地区レベルというか、コミュニティレベルの話。でも、国全体で医療費がこれからどんどん増えることが予想されるなかで、医療費を抑える健康政策やまちづくりはどうあるべきか、そういう視点での話はもっとしておきたかったですね。

坪山● そうですね。医療費の増大に少しでもブレーキをかけようということで、いわゆる生活習慣病を減らすことを十何年前からしてきた。その認知はみんなに広まったが、生活習慣病はそんなに減っていない。なにかブレークスルーがないといけない。高齢になっても元氣な人を増やさないといけない。元氣な人が多くなれば医療費はあまり増えないし、社会に貢献してもらいいただける。そうすることで減っている若い層を補ってもらう。働いて



坪山直生

つばやま・ただお
医学博士、京都大学大学院医学研究
科人間健康科学系専攻教授。

1980年3月京都大学医学部卒業。整
形外科医として主に骨・軟部腫瘍、骨
粗鬆症の臨床に携わった後、2000年
10月より京都大学医療技術短期大学
部教授。2007年4月より現職。研究領
域は臨床運動器科学。

もらわざるをえないのです。それには慢性疾患をできるだけ減らすこと、体
を動かして自立する能力が大事。国もキャンペーンをはじめたところです。

人間がほどよく体を動かすには、まちづくりをどうすればよいか。身近
な施設は遠すぎても、近すぎでもいけないでしょうね。車がないとどうし
ようもない状態では、人はじっとして動かなくなりますからね。

それに道の景観。好きずきにはありますが、歩きたくなる雰囲気にするこ
とは必要です。しかも、ほどよい距離にほどよい施設があること。公共交通
機関の整備は必要だが、ドア・トゥ・ドアはよくない。自分の調子にあわせ
て歩きながら景観も楽しめる、そういうまちがいいでしょうね。

谷口● 都会は、車が使えないことが多いから意外と人は歩いている。ところ
が、ちょっと田舎に行くと移動手段は車しかないことが多い。ですから、中
小地方都市の公共交通をいかに維持するかが大問題になるが、歩く習慣を
つけてもらうことも必要。人間の行動様式を変えてもらう。人間の行動を
いかに健康生活の方向に変えてもらうかですね。

それにしても、公共交通の維持がむずかしくなっていますね。

坪山● 財源が問題ですね。

谷口● 病院に行くにしても、どうしても車になる。歩いたりバスを利用する
よう意識を変えていただくことも大事だろうと思います。

二木● 健康に気をつける方は、どんどん増えてはいるのですがね。

谷口● 増えているが、そうでない人も増えている。

坪山● たしかに、両者の差は開いているかもしれません。

谷口● 1週間まったく外に出ないお年寄りもけっこう多い。半数くらいいる

二木淑子

ふたき・としこ

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授。県立富山中部高校3年時に同級生から「女は女子大に行け」といわれたのを契機に、お茶の水女子大学に進学。紆余曲折を経て、31歳でリハビリテーションの作業療法士免許取得。2006年より現職となる。



というデータもありますね。

二木● 半分も……。

谷口● そういう人はたいてい孤独な生活をしている。障がい者ではないが孤独な独居生活をしているお年寄りが増えていく。

■社会と個人とのつながりを強化する

二木● 古くからの団地などを再開発する調査を「実践プロジェクト」でしていましたね。ニュータウンも世代交代する。そういうなかで、外に出る人と内にこもる人、家の中で外とつながる人もそうでない人もいます。

高齢者の方に、自分の身辺処理よりも広い意味での活動で「なにが大事ですか」という調査をすると、「テレビが大事」と答えた人が多かった。私たちはテレビを娯楽、見て楽しむものと捉えがちですが、高齢の方は意外に情報を得る手段と考えていた。たとえば、震災の情報とか、人の生き方を追いかけたドキュメンタリーなどで、「こんなに苦労している人がいるんだから、自分もがんばらなくては」などと、自分に置き換えながらテレビを見ていたりする。新聞もそういうものですが、視力が衰えてもテレビの画像で向こう側の世の中が見られる。一般に考えられているのとは違う感覚で高齢者はテレビを捉えていると感じました。

ですから、じっさいに外に出ることは大事ですけど、多様な質のものとのつながり——物理的につながってなくても、つながっているという気持ちにさせる、そういう手段の提供が大事ではないかと思いますね。

谷口● 若い人でもそうです。若い人の引きこもりはけっこう多いですから

ね。それに、ネット世代はインターネットが離せない依存症の人も多い。面と向かったコミュニケーションをしなくなっていますからね。

坪山●昔とくらべるとモチベーションがなければ体を動かさない時代になったように思います。交通の便がどうこうではなくて、居ながらにして情報が得られると、外でしか得られない経験ができるとか、外でしか会えない人がいるなどの理由がないと、あえて動こうとしなくなりますね。

谷口●バーチャルの関係も大事ですが、フェイス・トゥ・フェイスの関係は刺激が大きいのではないかなと思う。まちづくりでもフェイス・トゥ・フェイスの出会いや交流の機会を増やことが眼目の一つになると思いますね。

■バリアは安全を阻害するだけのものでもない

坪山●安全対策とそのトレードオフというような流れはないのですか。

谷口●もちろん、それはあると思います。安全というのは最低限のミニマムを確保してからという話になります。

坪山●個人的な意見ですが、なにかがあると、「リスク管理が甘かったからだ。リスクをなくせ」などと言いつぎるのではないかな。たとえば、バリアフリーにしても、「バリアがハンディキャップになる人のために取り除いてあげましょう」というのが本来ですね。ふつうの人にはべつにバリアがあってもよい。ほどほどのバリアがないと注意力も養成されない。

二木●バリアはやっぱないほうがよいと思いますけどね。(笑)

坪山●バリアがあるがために参加すべき人が参加できないような事態はできるだけ排除しないとイケない。けれども、道に段差があるのはおかしいとなると、それはちょっと違うような気がする。

二木●多少の段差だと乗り越えられる車椅子が普及するなど、両方の方向から問題を解決する道もある。たとえば、視覚障がいの方むけに道に黄色の半球を埋め込んだ箇所があるが、白杖を使う方にはすごくやりにくいとおっしゃる方もいる。すべての人が快適だと感じてもらえる環境はむしろかしい。やはり、個別の対応が重要だろうと思いますね。

谷口●リスクを下げることは大事ですが、どう下げるかですね。なにかあると甚大な被害が出るという場合に、事後対応するのか、少しずつ投資して事前対応するのかという話です。事前に対応しておけば安くつくことも多いし、被害も少なくてすむし、早く回復できる。ところが、予知をしても予防

的な予算は獲得しにくい。現実には災害が起こってからしか対応できない。しかし、そういう事前の投資を考えたリスクマネジメントも必要だと思う。

■一人では生きられないのが人という生き物

坪山●将来を予知するにしても、どれくらい先の将来かですね。三世代が生き生きと暮らすことを考えると、いまの子どもたちの教育がいちばん大事。若い時代に自らの世界をどれだけ広げることができるか、友だちを増やす、関心のあるものがいくつもある、などの引き出しをたくさん用意できたら、大病にでもならないかぎり、引退の時期になっても「やりがい」や「生きがい」をきっちり保てると思う。

しかし、一人暮らしのような育ち方をする人が多くなると、フェイス・トゥ・フェイスの関係も成りたたなくなる。おじいちゃん、おばあちゃんにいろいろしてもらった思い出がないと、自らの子どもになにもなくなる。三世代といっても、一軒に三世代が一緒に住むことは少なくなるし、大人がよその子どもの教育に口を出すなどのよけいなことはしない時代になった。(笑)

谷口●時代とともに家族のあり方は、どんどん変わりますね。三世代が同じ屋根の下に住む必要はないが、つながっていることは大事。一緒に活動するとか、助けあうことがないと、安寧の都市の実現はむずかしいと思う。介護とか看護でもそうです。そういう意味でも、子どもの教育や考え方をしっかり鍛えることは大切ですね。

それに、個人個人が幸せになることが基本になる。しかし、一人ひとりがバラバラではしょうがない。やはりグループ。そのいちばん小さなグループが家族です。その家族とか親戚のグループが、徐々に地域のコミュニティの人間関係に広がる。大都会のコミュニティは崩壊していることが多いのですが、コミュニティの再構築というのですか、互いに助けあう組織の再構築が重要だと考えるのですが、どうでしょうか。

二木●私は東京の近辺に長く住んでいたのですが、訪問看護などの地域のサービスはかなり充実しているという印象です。

谷口●公的なサービスが、ですか。

二木●そうです。いまは介護保険などのサービスを使う時代なのかもしれないが、夜中に排泄の介護をしてくれるサービスまでありますからね。北

海道でもそういうサービスを提供している。ただし、田舎だとどうしても家族が世話をしないとイケない。そういう環境だと、身体的にせよ認知的にせよ、体の機能が低下すると一人では暮らせなくなる。

いっぽう、サービスが充実して財政的な予算もあるような都会では、生活保護でもプラス住居費の補助が多くて、一人でアパートを借りて、デイケアを使うなどをケアマネジャーがしてくれたりする。すると、一人では暮らせないような方までもが一人住まいできる。新聞がただで読める図書館が近くにあるよとか、歩いていて寒くなったらどこそに無料で飲めるお茶のサービスがあるよとかね。(笑)

谷口●公的な介護、看護サービスについても、大都会と地方との格差がずいぶん広がっているということですか。

二木●そうです、東京はすごい。しかし、いまの大阪府もそんなにお金がないし、京都にもそんなにサービスはない。東京だけがそんな感じになっている印象です。だから、地方自治体は、お金をかけずに質を上げる工夫をしないとイケない。必要な課題が目前になればみんな懸命になって解決するが、だれかがやってくれるなどと思っていると、動かなかったりする。

谷口●高齢者人口は、この10年、15年で急激に増えます。二木さんがおっしゃったように公的サービスをどこまで続けられるかが試されますね。

二木●たいていの夫婦だと、年金があればなんとか助けあってやっていけますが、最後は夫婦二人ではなくなる。多くの場合、女性が一人暮らしになります。一人暮らしの後期高齢者の女性の率がすごく増えている。しかも、いまの30代くらいの人だと兄弟が2人以上いる人の割合がずいぶん減っている。何年かで欧米型に近づくのではないでしょう。

谷口●個人個人で自らの生活設計を立てる時代になる……。

■地域や国の文化の集合体が「まち」

二木●日本の場合、政策自体がなんとなく男性たちが考えた内容。(笑) ほんとうの当事者はだれなのかなど、もう少しきちんと考えて議論しないといけないのではないかなと思うが、日本にはあまり議論する習慣がない。

谷口●年金が将来どうなるかですね。おっしゃったように、一人になったときの年金の額なんて、あんまり考えていない。公的サービスを維持できるかどうかは疑問ですね。しかも、物理的にも人手が足りなくなる。お金が

あったとしても、サービスできる人がいない。

坪山●人手以外のものは、ICT(情報通信技術)やロボットを活用するという
ことでしょうね。技術ができてコストとの兼ねあいだと思いますが、介
護ロボットにしても産業としてどんどん進みそうですか。

谷口●進むと思います。介護ロボットだけでなく、癒し系のロボットもそう
でしょう。すでにずいぶん出ています。これからはロボットやカメラ、ICT
Tでカバーするのですが、最後は人間の目で見ないといけない。

二木●一家に1台ロボットがという時代がくる……。 (笑)

谷口●こういう考え方は、国際的に連携して研究を進めることも大事だと思
いますね。「大学の世界展開力強化事業」の交流をしています。リバブル・
シティ(liveable city)という、住みやすい都市という感じ。安寧の都市とは、
少しイメージが違う。たとえば、バンクーバーとかシドニーは世界ナンバ
ワンの住みやすいまちのようにいわれるが、ああいうまちづくりが日本の
目標にもなりうるかどうかは、疑問ですね。

二木●オーストラリアの友人が、介護ボランティアのような資格をとる講
習を受けたのですが、高齢者が転んでも助け起こしてはいけないそうです。
「起こされたときにけがをした」と訴えられるかもしれないから、「自分で立
ち上がるまで待っていないさい」と教えられる。(笑)訪問リハビリテーショ
ンの人も、家庭を訪問して家屋の改造とか自助具などの導入を勧めるが、体
にはいっさい触れない。「いつものようにやってください」って。職種によっ
ても違うかもしれないが、それでは医療とはいえない感じ。

谷口●場所が変われば考え方もそうとう変わる。

二木●清拭したりするときには触るのでしょうけど、転んだときには触っ
てはいけない。カルチャーの違いに驚きますね。

谷口●住みやすさという点についても、日本人が感じる「いいまち」と西洋の
人が感じる「いいまち」とはかなり違う。感性が違う。ローカリティというか、
違いがあることを認識する必要がありますね。

二木●地区によっても違うし、日本との格差はすごく大きい。

坪山●なぜシドニーが上位にくるのでしょうかね。

谷口●一つは安全。それに、緑が多いとか教育水準が高いなどでしょう。シ
ドニー、バンクーバー、メルボルンあたりはつねに上位です。それを判断し
ているのはヨーロッパの人だから尺度も違う。(笑)

■日本的な感性に満ちてこそその「いいまち」

二木●世界の若者のアンケートで、いまの自分にどのくらい満足しているかという数値があるのですよ。アメリカや中国の若者は80数パーセントくらいが満足しているが、日本の若者は半分くらい。自分に展望がなく満足もできない日本人はネガティブなのですかね。

谷口●都市の住みやすさは客観的に測れないことが多いから主観的に、否定的に見る人が多いかもしれません。

二木●社会全体としては、日本はそんなに壊れていない感じですがね。

谷口●安全だしね。だから、逆に海外に行きたいへんなめにあう。

二木●社会的に壊れている部分もあるけど、日本だと財布を置き忘れても出てくるとか、そんなに壊れてはいない。ほんとうに安全な都市です。それでも、あと何年かすると壊れるのですかね。(笑)

坪山●いやあ、壊れないような気もする。しかし、簡単にいえば悪い人は増えていると思う。感性をどう維持するかです。教えてどうなるものではないが、私が子どものころは、「他人の迷惑になることはしない、お年寄りには優しくせよ」と学校で習いましたが、最近はどうなのでしょう。

谷口●家庭内でも教えられてきたのですが。

坪山●家庭内での教育力は落ちているかもしれない。

二木●これが道徳的で、こう考えるべきという日本人の暗黙の了解が壊れかけていますよ。個人がよければよいという感覚が支配的になりかけている。

坪山●阪神・淡路大震災でも、こんどの大震災でも思ったのですが、あの状態で炊き出しにきちんと並ぶとか、大規模な窃盗や略奪が起こらなかったことに外国人も驚いていましたね。それに、2002年のサッカーのワールドカップ日韓大会のキャンプ地の一つになった大分県中津江村。村のおじちゃん、おばあちゃんが踊りでカメルーンの選手を大歓待した。選手たちも喜んで一緒に踊りだした。あんな歓待は日本だけでしょう。今回のブラジル大会でも、当時の村長はカメルーンの応援に行き、村民はカメルーンの試合を深夜に起きてテレビで応援していた。(笑)そういう感性は、どこかで安寧の都市につながるのではないのでしょうか。

谷口●縁を大切に、人を受け入れる。そういう感性は大事ですね。諸外国は、社会階級や人種による問題はまだまだですからね。

坪山●わざわざ外に向けて自慢することではないが、大事にしたい日本的な感性をこれからの先端工学的な技術などうまく融合できたらね。

谷口●安寧の都市というのは、ある意味では日本独特の感じ方かもしれない。英語だとセキュアド・シティ(secured city)とカリバブル・シティというように無機格的になってしまう。日本の安寧の都市には、さきほどの感性、それから感じ方、そういう有機的なものが加わる。ところが、それを英語で説明しようとするともずかしい。大切なところがぜんぶ飛んでしまう。(笑) サービスがよいとか、空気がきれいというのは共通しても、そこに暮らしている人たちの潤いのある暮らし方、自然との調和とかの日本的な感性を海外の人に説明するのはむずかしい。

二木●安らぐとか、ホッとするとか、居心地がよいとかですね。

＊

坪山●このユニットは5年で一区切りですが、履修生との縦横のつながりはきつと、こんごに活きると思う。それがどこかで一つの力に、あるいはいくつかの力になりうるのではないかと期待します。

谷口●期待できます。直接なかたちで現れるかどうかはわからないが、いろいろな知識なり経験が一人ずつに刺激として残っていて、それがどこかで反応して現れ出てくるはずです。

坪山●それをぜひ期待したい。



2014年6月23日(月) 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻451会議室